山崎郷土報

NO. 95
12.5.1

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62－2000

中寺と観音寺

史跡部

姫路城主池田輝政、播磨西七郡の代官、中村主殿時代、山崎古寺略記の一部に慶長十三年（一六〇八）慶長検地帳によれば西山のすそ、春安村塚谷に、寺居屋敷、一反高二石三斗の御赦免の記録がある。池田輝澄時代に入って寛永年間、塚谷には池田氏家中の墓地があった。今でも備前墓とし称している。少し南へ寄って春安と段との境の山すそに松平周防守時代の城地図に圓明院と言う天台宗のお寺が描かれている。院の馬場から真直ぐに道路があり山門に突き当たっている。境内もかなり広く数段高い所に本堂があり天台密教の護摩堂があって藩主の祈祷が行われていた。又、松平備後守恒元時代にも圓明院で祈祷が行われていた記録がある。又、段村の山すそにも古くから観音寺があって、昔金蔵坊と言う修験者が堂守りをしていて、貴船神社の雨乞いなどの祈祷を兼ねていた形跡がある。本多家時代では圓明院を成就院と言い、吉祥山、願行寺と言った。通称中寺と称していた。中寺は江戸時代山崎歴代藩主の祈祷寺であった。建立年代は詳かでないが、凡そ寛永年間ではないかと思われる。松平周防守、松平備後守時代は圓明院と称したが、本堂の御本尊は不動明王で脇侍には吉祥天、薬師如来等も祀られていたと言う。吉祥天は毘沙門天の妃にして五穀豊穣の福徳富貴の女神として領地の五穀豊穣を祈ったものである。又、不動明王は大日如来の化身にして背に火焔を負い忿怒の相を持って一切の悪を降して、護摩を焚いて火焔をもって汚れを焼き浄め、衆生を守る祈りとした。本多家では願いが成就する

目次

①中寺と観音寺　史跡部　1
②宍粟郡内の神社（二）　久保　寅夫　4
③江戸時代の宍粟郡内梵鐘集成Ⅳ　片山　昭悟　8
④上比地森ノ上遺跡の発掘調査について　山崎町教育委員会　16
⑤当尾・柳生の里を訪ねて　垣口　正信　18
⑥山崎町歴史街道（三）　会報部　20
⑦事務局だより　23

様成就院とも言い、吉祥山願行寺と称した故である。

明治二年神仏分離令が発せられ、明治四年には廃藩置県となり、時代は目まぐるしく廻転して、藩主は東京に去る。明治五年廃仏毀釈の運動が起こり、明治七年城取壊し令と共に寺の建物まで破壊する様に神社庁より進言されたが、地元信者の一部が此の寺を守った。併し乍ら檀徒無き故、寺の経営は困難となり、地元の信者のみにて僅かにささえられていた。

明治中期頃住持が死亡し、一たん無住となり、寺地は比叡山延暦寺本山の預り地となり、本堂は荒廃し、山門、金剛力士像は京都に持ち去られ以後行方知れず。寺地はその後同郡安積の天台宗普門寺が管理し、寺は兼帯となる。大正になって本堂は倒壊の危機に至り遂に取片づけ、本堂跡に家中武家屋敷の長屋門を移し大正九年、地元の信者の寄進により吉祥堂の跡に持仏堂を建て御本尊不動明王並びに大般若経等を移し信者の一人が堂守りをしたと言う。

昭和の初め頃、福原町東小勝さんの発起で寺の北接地、円山に四国八十八ケ所の石像を祀り、弘法大師の石の立像をも建てた。小針氏や土方梅吉氏等の多くの信者の寄進によったと言う。戦時中堂守の死亡により一旦無住となったが昭和二十四、五年頃、一部信者より中寺復興の声が出て運動が始められたが資金が思う様に集まらず又、断念す。当時の発起人、春名荒太郎、春名謙介、北弥太郎、南部耿介氏等々福原塾の残存者で、郷土史研究会の会員も後援者となっていた。併しいずれも高齢者で漸次死亡して是も遂に挫折す。昭和四十年代に春安の横江敏夫氏の肝煎りによって吉祥山墓苑が計画され着々進行して寺の南接墓地を整地開発して一応完成する。昭和五十年代に入り五人の製材業者により寺跡地にゴルフカントリー場が計画され、山門跡にカントリー場が建設された。併しその後製材業者は手を引き、人手に渡ったがゴルフも段々下火となり、昭和六十年代から平成へかけて寺の北接地、円山が開発されて日本レフレックス会社の工場となった。寺の境内だった所は半分崩され、ブロックを積んで道路と職員の駐車場になっている。今は本堂跡のみ残っているが、寺の面影は無く、吉祥墓苑のみ立派に残ったが全く幻の寺となってしまった。一方段の観音寺は江戸時代は中寺の奥の院として願行寺の住職が兼務して祈願されていたが、観音様の信仰は又、格別で一般に広く旧山崎町でも多くの信者がいて段の観音様は霊験あらたかとして有名であった。郡内観音霊場三十三ヶ所として崇められている。

御本尊は十一面観音様で縁日は一般に十七日であるが、お厨子の開帳日は八月九日となっている。同日は近村の信者は夜間総がかりでお祭りされている。観音様のお姿は三十三態の応化身となって衆主をお救い下さる有難い仏様であるが、今の若人の間では信仰が薄くなり、中には段の観音様の存在を知らない者が多くなっている。人間の弱い迷いの心を救って下さる有難い仏様観音菩薩の大悲閣が段の山ずそにある事を知ってもらいたく郷土研究会では此の度史跡の石碑を建てる事にした。又、境内にある句碑は山崎町ふるさとかるたにもなっている。建立者の四睡庵素練は、

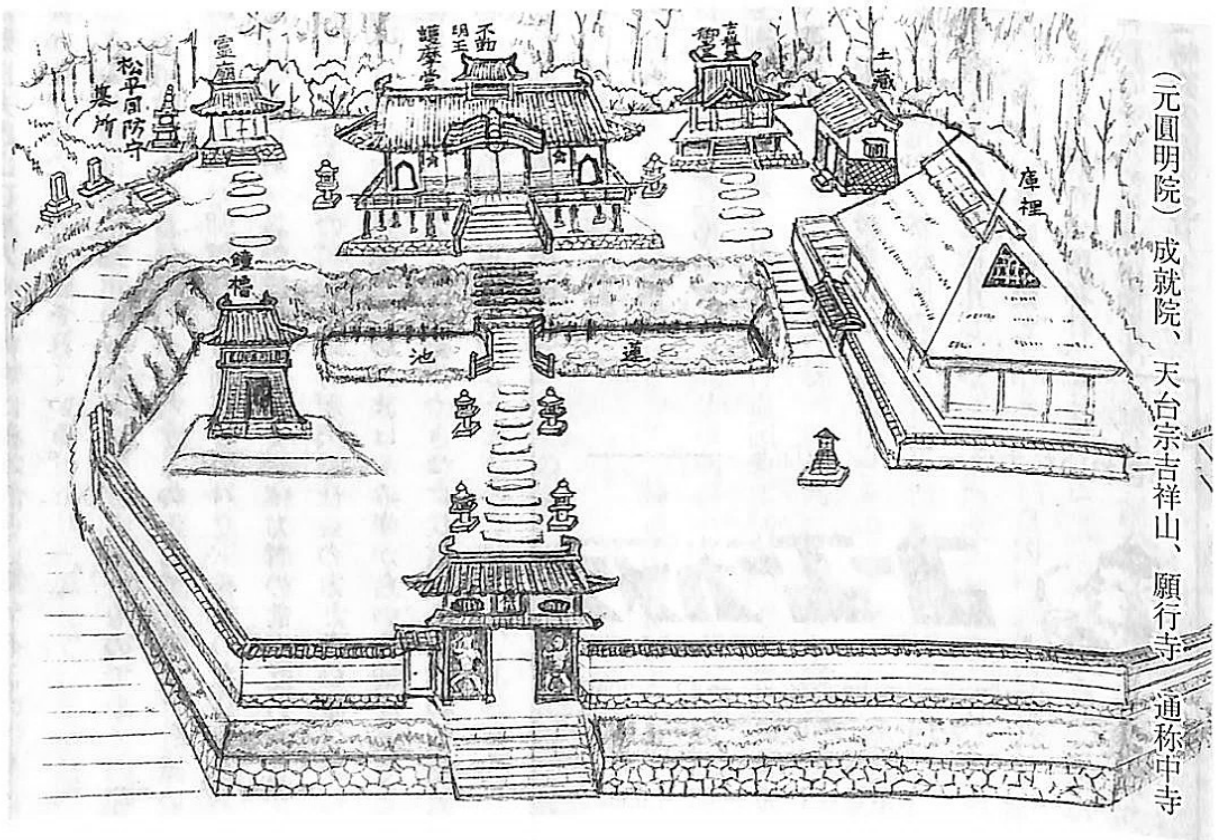
幕府の御朱印寺青蓮寺の僧で、天明年間から享和年間にかけての住職であった。彼は有名な俳人で播磨は勿論、他国にも数多くの門下生がいたと言う。彼の編集の内、「風月集」は芭蕉の百回忌を記念したもので寛政五年の発刊である。彼の死後多くの門人が供養のため此の句碑を建てた。初めは、元山崎の埴尾谷にある荒神社の境内にあったが、明治の中頃、段の観音寺の境内に移された。　句碑

木の下は、汁も膾（なます）もさくらかな　芭蕉

月一つ松に残りて、野分哉　素練

下りぶね、砧（きぬた）遠なり近うなり　阿丘

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本　　店　ＴＥＬ(0790)62-0700
さつき通り　ＦＡＸ(0790)62-2117
ブックランド店　ＴＥＬ(0790)64-2051
山崎町中井　ＦＡＸ(0790)64-2052



（元圓明院）成就院、天台宗吉祥山、願行寺通称中寺

『宍粟郡内の神社（二）』

久保寅夫

はじめに

私は氏神さんに詣でて一ヶ所に集められ、祀られている神々を拝むたびに、神仏分離や廃仏毀釈が行われる以前、一村一社制が実施されるまでは、神々はたとえ狭く粗末な社祠であっても、神は座を持ち村の人びとに崇拝されていた。ところが明治三年ごろから神社改めが各地でおこなわれるようになった頃から変わっていった。

村氏神制が成立し、雑多な神仏は排除され合祀された。（宍粟郡誌の神社一覧表に明治何年何月何日に合祀とされている。）このことは一村一社制が実施されたことを物語っている。合祀は簡単に行われたものでなく、明治三年頃から始まり明治末年までかかった。実施後数年で元の所に移された社もある。合祀に村民がどんなに反対したかがうかがわれる。一村一社制になったいきさつや、村民の強い反対を押しきってまで実施したのかが知りたく、書物を捜し、神々の明治維新（安丸良夫著）の良書を入手したので紹介します。

神仏分離と廃仏毀釈

神仏分離や廃仏毀釈はなぜおこなわれたか、当時の人達はどのように受けとめたか、日本人の精神生活はどのように変わったか、安丸良夫氏は日本人の精神史に根本的といってもよいほどの大転換が生まれた。と主張されている。

この転換は明治初年の数年間にとげられたものでなく、律令制下で宗教的な妖言は人心を惑わすものとして、もっとも重い刑罰の対象となった。信長と一向宗との対立、秀吉のキリシタン禁制など新しい統一者の成立の過程で、権力者の前に立ちふさがったものは抑圧された。明治政府が国際社会の力と力の闘技場に加わろうとするとき、私たちの民族は、みずからの内的な弱さと不安に対応して、弱さと不安をいっきょに代償する精神の内燃装置を必要としていた。秘められた弱さと不安とのゆえに、持続する緊張と抑制とが必要であった。伝統は、この課題にあわせて分割され再編成された。

神学

神仏分離と廃仏毀釈にかかわる政策が、新政府の布告類のなかで具体化してくるのは、祭政一致と神祇官再興と全国神社、神職とを定めた慶応四年（一八六八）三月十三日

きれいなカラープリントの店
Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
本店　宍粟郡山崎町東鹿沢 26-3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120－440－990
FAX 0790－62－7429
TEL 0790－63－0533
咲ランド店

布告以降のことである。王政復古の大号令に神武創業云々の一句をいれたのは、国学者玉松操の意志によるものであった。神武天皇の国土平定が神々の霊威に助けられた神政政治的な様相をもっていたからであろう。こうした記紀の記載を古代の律令制のもとでの制度に結びつけて独特の国体神学が構成されたが、それが現実政治の場で具体的な役割を果たそうとする時代がやってきたことを、右の布告は、あらわしている。新政府の中枢をにぎった薩長派によって、そのイデオロギーとして登用された新政権の権威を確立するために、天皇の親権的絶対性が強調されねばならなかった。国体神学はその理論的な根拠づけであった。

こうした政治状況の中で、キリスト教の影響力について不安と恐怖があった。キリスト教の浸透は不可避だと考えられ、これに対抗するために、民族的規模で意識統合をはからなければならず、そのために神道国教主義的な体制が必要だと考えられた。

神道の国教化

一部の国学者や神道家の主張は、誰も容易には反論することのできない正統性と権威性とを獲得していった。さきの布告のような内容を一つのステップとして、「皇国内宗門復古神道」に改め、産土神（うぶすながみ）と氏子（うじこ）改（あらため）をおこなって宗門改め制にかえる、という方向につながっていった。頂点に宮中祭祀と伊勢神宮をおき、中間に各地の官国弊社を配し、底辺に村々の産土社をすえ、こうした国家的規模での神社祭祀の統一的体系に日本人の宗教生活の全体を編成し帰属させるという神道国教体制が、その究極目標であった。神仏分離の諸布告でも廃仏は明言されないが、神祇事務局や神祇官に結集した急進派にとって、神道国教体制と仏教とはあい容れるものでなかった。

明治の政府にとって、長い歴史のなかで国民生活に根をおろした仏教は布告や制度で除去しうるものではなく、仏教勢力と提携を必要としていた。別の視角から考えると、古代的神政的国家的体制の中でのみ現実的に機能しうる祭政一致や神祇官制が、近代国家として明治の国家体制の原理になりうるはずはなく、明治の国家体制は欧米に模倣せざるをえない必然性をもっていた。国体神学は、神社祭祀という儀礼的側面に後退した。

明治初年の神仏分離、廃仏毀釈、神道国教化政策は無謀な試みであるようだが、失敗とも見ることもできない。日本人の宗教生活の全体が、それを媒介としてすっかり転換してしまった。神仏分離というと、既にあった神々を仏から分離することのように聞

こえるが、分離され奉斉されるのは、記紀神話や延喜式神名帳によって権威づけられた特定の神々であって、神々一般でない。廃仏毀釈といえば廃仏の対象は仏のように聞こえるが、現実に廃仏の対象になったのは、国家によって権威づけられない神仏のすべてである。

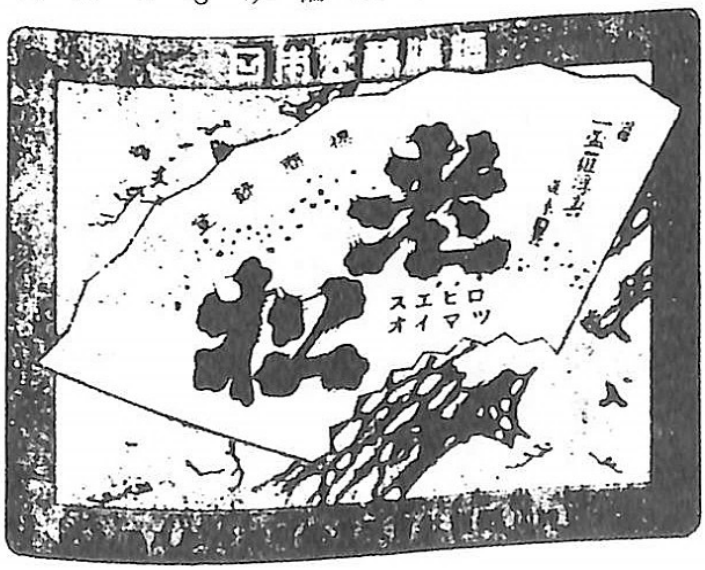
記紀や延喜式神名帳に記された神々に、歴代の天皇や南北朝の功臣など、神話的にも歴史的にも皇統と国家の功臣とを神として祀り、村々の産土社をその底辺に配し、それ以外の多様な神仏との間に国家の意思で絶対的な分割線をひいてしまうことが、そこに目指されたことであった。真宗はその宗教としての独自性をもっともよく守り、真宗の存在こそが神道国教主義的な宗教政策を失敗させる根拠となったが、その真宗さえ一時は明治四年（一八七一）本願寺の上奏文案に「我宗ニ崇ムル所ノ本尊ハ弥陀如来ト申テ、乍恐皇国天祖ノ尊ト同体異名ニシテ智慧ヨリ現レテハ、天ノ御中主尊ト弥シ奉リ、慈悲ヨリ現レテハ弥陀如来ト申シ候」これはけっして例外的な諂諛の言葉ではなかった。

神々の体系

あらたに樹立された神々の体系は、水戸学や後期国学に由来する国体神学がつくりだしたもので、明治以前の日本人にとっては、思いがけない性格のものだった。伊勢信仰は農業神としての外宮に重点があり、天皇大神信仰も、民衆信仰の次元では皇祖神崇拝のそれではなかった。

天皇の神権的絶対性を押しだすことで、近代民族国家形成の課題をになおうとする明治維新という社会変革のなかで、皇統と国家の功神こそが神だと指定されたとき、誰も公然とそれに反対することはできなかった。当時の日本人の宗教意識に現実的に可能であったことは、神々への崇拝をできるだけ儀礼的な次元におしこめ、代償として、そうした神々への崇拝含意されていたはずのイデオロギー的現実を内面化し、国家意思の前にそれぞれの崇教的価値を証することだった。それは近代日本の天皇制のための良民鍛治の役割を各宗教がにない、この点での存在価値を国家意思の面前で競いあうことであった。

良民鍛治の役割から仏教よりとさらにきびしく抑圧されたり否定されるのは、民俗信仰であった。民俗信仰の抑圧は、日本社会の体制的な転換に際して、百姓一揆、若者組ヨバイ、さまざまの民俗行事、乞食などが禁圧され、人々の生活態度や生活秩序が再編成され、再掌握されてゆく過程の一環、もっとも重要な部分の一つであった。この過程を全体としてみれば、有用で価値的



なものと無用有害で無価値なものとの間に分割線をひくことであった。分割線の向う側にあるものは、旧慣・随習、迷信、愚昧などであり、それらの全体が否定性をおびさせられていた。こうした否定性を本来的におびさせられた諸次元が、みずからの側に提示しぬくことは、もっとも困難なことであった。そのため、広汎な民衆の間にうつ屈した不安や不満が蓄積されていっても、それは時間の経過のうちに曖昧に押し流された。

過剰同調的特質

近代社会への転換に際して、旧い生活様式や意識形態が改められ、民族的な規模であらたな生活や意識の様式が成立してゆくのは、どの民族にも見られる普遍史的な事実であり、それは、近代的な国家と社会の成立をその基底部からささえる過程である。日本のばあい、近代的民族国家の形成過程は、人々の生活や意識の様式をとりわけ過剰同調型のものにつくりかえていったように思われる。

日常的には神社崇拝とほとんど無縁な私達ではあるが、元旦や結婚式や家屋の新築などに関しては、神社神道の世話にならないと、どこかおさまりが悪く内心におちつきなく安らぎがえられない。旧い由来をもつ信仰的習俗のように思いやすい有名神社初詣や神前結婚式は、実際にそのようなものではない。初詣での明治神宮が、六十年あまり以前に造営されたので、一般には旧い由来をもつと思われる神前結婚式は大正天皇の婚儀にさいして定められた様式が、やがて民間に普及した。

これらの宗教的行為がふかい宗教性なしになされるには、そのゆらいからしても当然のことである。深い内省なしに、雑多な宗教的なものがほとんど習俗化して受容されている。ほとんど無自覚のうちに住むことを強要してくる習俗的な圧倒的に優勢で、そこからはみだすとおちつかなくなり、神経症的な不安にとりつかれてしまうところに、私たちの社会の過剰同調性がある。

安丸良夫著『神々の明治維新』より

参考

氏　神

氏集団の守護神のちに地域共同体の神、古代ではもともと支配者層の政治的血縁的集団の血縁的祖先へと変化した。さらに氏内部の一門に氏神が創始される場合もあった。いずれも氏人を守護する神として崇拝された。その後近世郷村社会のなかで、村落の守護神、すなわち鎮守神として村落共同体成員が祀る産土神と氏神と称するようになり、この地縁的氏神が定着していった。

中世、近世の郷村社会にあっては、そうした地縁神としての氏

コーヒーハウス
らふ
山崎文化会館西
☎62－8559

神を祀るための祭祀組織が作られ、年中行事も氏神祭祀を中心に組み立てられた。また氏神は村落社会の秩序維持においても要の位置を占め、その神前は各種の入札や一揆に際しての一味の水の場として機能した。

『近世における宍粟郡内梵鐘集成Ⅳ』

宍粟郡の梵鐘と鋳物師について

片山昭悟

一　はじめに

播磨国宍粟郡金屋村鋳物師長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛は、野里鋳物師芥田氏などとともに播磨国鋳物師として知られる。

江戸時代の宍粟郡の梵鐘について金屋村鋳物師長谷川氏を中心に『山崎郷土会報』にこれまで、82号で山崎町、83号で一宮町、84号で波賀町・千種町、85号で安富町、90号で長谷川氏の集成を、92号、93号、94号と江戸時代の宍粟郡の梵鐘について年代順に紹介をしたが、宍粟郡には姫路野里鋳物師の鐘、姫路京口住小野太郎大夫の鐘、上郡高田住の鐘、大坂の岸本七左衛門の鐘、菅原安欲の鐘、京都三条釜座和田信濃の鐘がみられることからそれぞれの鋳物師ごとに梵鐘を紹介する。

二　宍粟郡内の梵鐘・半鐘にみえる鋳物師

1　播磨国姫路野里鋳物師について

姫路野里鋳物師の芥田五郎右衛門は播磨国鋳物師の統領である。芥田氏の梵鐘は、宍粟郡には現時点では見あたらないが、野里鋳物師のものは、瀬川安右エ門藤原正則と田中氏の鐘である。

①波賀町上野の井の谷半鐘は、寛政十二年（一八〇〇）姫路野里鋳物師の瀬川安右エ門藤原正則である。

宍粟郡で瀬川氏のものは、この半鐘のみである。

②安富町瀬川の妙福寺鐘は、弘化三年（一八四五）の姫路田中氏の鐘である。もと三木郡吉田村妙覚寺什物である。田中氏は姫路野里鋳物師で、田中五郎兵衛、田中五郎右衛門が知られる。

2　姫路京口住の鋳物師について

播州姫路京口住の鋳物師で宍粟郡にみられるのが小野六大夫と小野市兵衛尉藤原家信・小野太郎左衛門尉藤原正家である。

①山崎町寺町の大雲寺の梵鐘は、安井俊二氏の『金屋鐘銘写』によると

元禄七年（一六九四）初鋳
享保五年（一七二〇）再鋳とされる。

冶工は播州姫路京口住　小野太郎左衛門尉藤原正家である。

②山崎町元山崎の明源寺喚鐘は、享保六年（一七二一）の冶工

小野六大夫で現存する。

小野六大夫は姫路京口住の鋳物師として知られる。小野氏は、このほかに小野七左衛門が知られる。

明源寺は金谷の譲尾にあった中世の古代寺院の長谷山遊鶴寺と関わりのある寺院で、天正のころ羽柴秀吉によって柏原城とともに焼失させられたとの言い伝えがある。

③一宮町須行名、名畑観音堂の梵鐘は、貞享二年（一六八五）再鋳で、鐘銘によると、新田義貞の発願によるものとされる。

万治三年（一六六〇）　初鋳
寛文六年（一六六六）　鋳直
貞享二年（一六八五）　再鋳

冶工は播州姫路京口之住　小野市兵衛尉藤原家信である。

この鐘は現存するもので、下帯には菊文が見られる。姫路京口住の鋳物師は小野六大夫が知られる。

④波賀町安賀、満願寺の旧梵鐘は、現梵鐘銘から

「正徳二（一七一二）壬辰年三月
姫路京口之住
小野太郎左衛門尉藤原正家」であることがわかる。

宍粟郡における姫路京口住の小野氏によるものは、貞享二年（一六八五）再鋳の一宮町須行名、名畑観音堂鐘が小野市兵衛尉藤原家信である。

3　姫路龍野町三丁目、油屋（あぶらや）岩蔵について

宍粟郡の江戸時代の梵鐘には姫路龍野町三丁目、油屋（あぶらや）岩蔵と刻む喚鐘が二例みえる。一宮町百千家満の常楽寺の文政十二年（一八二九）の喚鐘は、賣元　姫路龍野町三丁目油屋岩蔵と、千種町西山の仙光寺の天保十五年（一八四四）の半鐘は、賣所　姫路龍野町三丁目あぶらや岩蔵とある。長谷川氏の梵鐘が販売できない時期のものであろう。

天保十一年（一八三二）に長谷川五郎兵衛は段村の松井太郎大夫に鋳物師の権利を譲っている。

4　上郡高田住の鋳物師について

上郡高田住の鋳物師は、山崎町上牧谷の元有谷山菩提寺の喚鐘は宝暦十一年（一七六一）冶工高田住の中村弥右衛門の鐘である。このほかに一宮町上岸田垣尻の御大師堂の鐘は、中井幸右衛門久吉で、清雲山と法泉庵の銘が陽鋳されている。

5　大坂の鋳物師について

①岸本七右衛吉久の喚鐘について

宍粟郡の名が刻まれる佐用郡南光町漆野光福寺喚鐘は、

元禄六年（一六九三）
冶工　岸本七右衛吉久で現存する。
「　宍粟郡漆野村　」とある。

岸本氏は、坪井良平『梵鐘と古文化』によると、大坂の鋳物師とされる。宍粟郡では江戸時代の現存する鐘でもつもと古いものである。

②杉田伊右衛門の梵鐘について

一宮町西安積の普門寺の旧梵鐘は、

寶暦六年（一七五六）

冶工

摂州大坂住鋳物師杉田伊右衛門

藤原安広

摂州大坂住鋳物師の杉田伊右衛門藤原安広である

この梵鐘は淡路津名郡柳澤村岩上大明神鐘である。

平成六年に地元に里帰りしている。現在ある梵鐘は京都太秦の岩澤の梵鐘である。

③菅原安欲について

安富町長野の真光寺喚鐘は、

宝暦十二（一七六二）

冶工　菅原安欲　である。

冶工名は小さく囲って陽鋳されている。

次の年の宝暦十三（一七六三）には千種町西蓮寺の喚鐘にみえる。

宝暦十三癸未歳十一月　日

冶工　菅原安欲

冶工の菅原安欲は、坪井良平『梵鐘と古文化』によると、大坂鋳物師とされる。

菅原安欲は、宍粟郡には宝暦十二年と宝暦十三年の二つの喚鐘が現存する。

6 京の鋳物師三条釜座について

鋳物師研究で宍粟郡金屋村鋳物師長谷川孫兵衛の名を全国の鋳物師に知らせたのは、寛政五年の宍粟郡岸田村（現宍粟郡一宮町上岸田）佛心寺における京都三条釜座和田吉兵衛との争論である。

京三条釜座は宍粟郡にも現存しているもの、記録にみられるのがある。和田信濃と國松近江がある。また、同じ京でも出羽大掾室町宗味のものが現存する。

宍粟郡の京の鋳物師についてはつぎのようである。

寺　院　　冶　工

①一宮町福知　大徳寺喚鐘　三条釜座和田信濃掾國次　現存　元禄十年（一六九七）

②山崎町中野　極楽寺喚鐘　出羽大掾室町宗味作　現存　元禄十年（一六九七）

③山崎町寺町　興国寺鐘　三条釜座和田信濃掾國次　記録　正徳二年（一七一二）

④千種町千草　西蓮寺双盤　出羽大掾室町宗味作　現存　享保二十年（一七三五）

⑤山崎町春安　願行寺喚鐘　京三条和田信濃　宝暦十二（一七六二）　現存

⑥千種町岩野辺　福海寺喚鐘　京三条住國松近江　宝暦十三（一七六三）　現存

⑦波賀町斎木　安養寺喚鐘　京三条釜座和田信濃　宝暦十四（一七六四）　現存

①元禄十年（一六九七）の一宮町福知、大徳寺の喚鐘がみられる。

「元禄十丁丑年七月自忽日
治工　三条釜座和田信濃掾國次」で、
「播州完粟郡三方庄
福智村法雲山大徳寺」とある。

三条釜座和田信濃の作には宝暦十二年の山崎町春安願行寺鐘（現存）、宝暦十四年鋳直の波賀町斎木安養寺鐘が知られる。

②山崎町中野　極楽寺喚鐘は
元禄十年（一六九七）七月二三日
出羽大掾室町宗味作　である。
一宮町福知大徳寺の喚鐘が元禄十年であり、治工三条釜座和田信濃掾國次でなしに出羽大掾室町宗味である。宗味は京室町の鋳物師である。

③山崎町寺町の興国寺鐘は、安井俊二氏の「金屋鐘銘写」によると、正徳二年（一七一二）であり、三条釜座和田信濃國次によるものであるとされる。三条釜座は、大阪府堺市光田家蔵文書によると、当時鋳物師を統率している真継家より、正徳五年（一七一五）に離れていくことになる。

④千種町千草西蓮寺の双盤は、
享保二十年（一七三五）
京室町住出羽大掾宗味作　である。
極楽寺喚鐘が元禄十年（一六九七）のもので、同じ京室町住出羽大掾宗味の三十八年後の享保二十年（一七三五）のものである。

⑤山崎町春安の願行寺喚鐘は
宝暦十二（一七六二）壬午
京三条和田信濃　とある。
宍粟郡で宝暦のころ京三条和田信濃作によるものは、波賀町安養寺鐘が宝暦十四年（一七六四）鋳直である。

⑥千種町岩野辺　福海寺喚鐘は
宝暦十三（一七六三）癸未天三月吉日
京三条住國松近江　である。
西蓮寺の大坂菅原安欲の喚鐘と同じ宝暦十三年に作っていることがわかる。

⑦波賀町斎木の安養寺喚鐘は
宝暦十四年（一七六四）に鋳直している。
冶工は京三条釜座和田信濃である。
福海寺喚鐘が宝暦十三年（一七六三）であり、つぎの年にあたる。

三　まとめ

江戸時代の宍粟郡の梵鐘について、長谷川氏以外の鋳物師は、次のようになる。

鋳物師	冶工名	数	
1　姫路野里鋳物師	瀬川安右エ門	1	現存・記録　宍粟郡 現存　波賀町　半鐘
	田中氏	1	現存　安富町　喚鐘
2　姫路京口住	小野六大夫	1	現存　山崎町　喚鐘
	小野太郎左衛門尉藤原正家	1	記録　山崎町
	小野市兵衛尉藤原家信	1	現存　一宮町　梵鐘
	小野太郎左衛門尉藤原正家	1	現存（鐘銘による）波賀町　梵鐘
3　姫路龍野町三丁目	油屋（あぶらや）岩蔵	2	現存　一宮町・波賀町　喚鐘
4　上郡高田住	中村弥右衛門	1	現存　山崎町　喚鐘
	中井幸右衛門久吉	1	現存　一宮町　喚鐘
5　大坂の鋳物師	岸本七右衛吉久	1	現存（佐用郡南光町）喚鐘
	菅原安欲	2	現存　千種町・安富町　喚鐘
	杉田伊右衛門藤原安広	1	現存　淡路　梵鐘（元一宮町）
6　京の鋳物師	京三条和田信濃	3	現存　山崎町・一宮町・波賀町　喚鐘
		1	記録　山崎町
	京三条住國松近江	1	現存　波賀町　喚鐘
	京室町住出羽大掾宗味	2	現存　山崎町　喚鐘 千種町　双盤

以上であるが、姫路野里鋳物師の瀬川安右エ門の半鐘が波賀町に現存する。田中氏の作も安富町に現存する。姫路京口住の小野六大夫の喚鐘が山崎町に、小野市兵衛尉藤原家信の梵鐘が一宮町で現存する。小野太郎左衛門尉藤原正家の名は山崎町の梵鐘記録と波賀町の現梵鐘の鐘銘からである。姫路龍野町三丁目のあぶらや岩蔵の喚鐘が一宮町と千種町にある。上郡高田住中村弥右衛門の喚鐘が山崎町に、中井幸右衛門久吉の小さな喚鐘が一宮町に現存している。

大坂の鋳物師は岸本七右衛吉久の喚鐘が旧宍粟郡の佐用郡南光町に現存する。また、菅原安欲の千種町と安富町に現存する。京三条和田信濃の作が宍粟郡には 山崎町・一宮町・波賀町に現存する。京三条住の國松近江の作も波賀町に現存する。京室町住出羽大掾宗味の作は山崎町と千種町に現存する。宍粟郡の梵鐘について調査をしていると宍粟郡には冶工名が見られない半鐘・喚鐘も多くあり、今後の調査で解明できればと思っている。

千種町

福海寺　京三条住國松近江

西蓮寺　菅原安欲

双盤　京室町住出羽大掾宗味

仙光寺　あぶらや岩蔵

波賀町

安養寺　京三条和田信濃

上野井ノ谷　瀬川安右エ門

満願寺　小野太郎左衛門尉藤原正家（鐘銘）

一宮町

御大師堂　中井幸右衛門久吉

常楽寺　油屋岩蔵

大徳寺　京三条和田信濃

名畑観音堂　小野市兵衛尉藤原家信

普門寺旧梵鐘　杉田伊右衛門

山崎町

極楽寺　京室町住出羽大掾宗味

元有谷山菩提寺　中村弥右衛門

興国寺　三条和田信濃（記録）

大雲寺　小野太郎左衛門尉藤原正家（記録）

明源寺　小野六大夫

願行寺　京三条和田信濃

安富町

真光寺　菅原安欲

妙福寺　田中氏

佐用郡南光町漆野　光福寺　岸本七右衛吉久

山崎町中野極楽寺喚鐘

撞座

冶工京三条釜座　和田信濃

山崎町春安願行寺喚鐘

図1　宍粟郡の梵鐘と鋳物師分布図

上比地森ノ上遺跡の発掘調査について

山崎町教育委員会

平成十一年度に山崎町上比地の森ノ上から宮ノ前において、中山間地域整備事業として道路が拡幅されることになり、教育委員会ではこれにあわせて発掘調査を実施することになりました。

当地域は、標高四六八メートルの国見山から派生した観音山の山裾にあり、揖保川によって形成された河岸段丘上に位置していて、城下一帯が一望できます。大変立地状況がよいことから、遺跡が存在する可能性が以前より指摘されていました。教育委員会の埋蔵文化財分布調査では、古墳時代並びに奈良・平安時代の土器の散布地とされています。

奈良時代の『播磨國風土記』に記載のある「宍禾郡比治里」は現在の上比地付近と推定されます。比治里という名称は里長の〃山部の比治〃から付けられています。平安時代の『和名抄』では「比地郷」とされています。室町時代の『看聞日記』によると、嘉吉三年（一四四三年）に伏見宮家領の荘園であったとされ、比地御祈保の代官に小河源左衛門が任ぜられています。また、近くには上比地部落の氏神で、榧の一本堂として知られる岩田神社が鎮座しています。

これらのことをふまえて平成十一年五月に兵庫県教育委員会の指導を得て、遺跡確認調査を行いました。拡幅予定地内に二メートル×二メートルのグリッドを八ヶ所、一メートル×四メートルのトレンチを一ヶ所設定して実施しました。この確認調査で、弥生時代の竪穴住居址の一部と柱穴、平安時代の柱穴が検出されました。田の耕作土を取り除いたところですぐに確認できました。この付近では、五十センチも堀り下げれば、二千年前の遺跡が残っているのです。その後全面調査を実施し、記録保存することになりました。全面調査といっても、あくまで工事が実施される範囲内ですので、今回は二メートル程度の幅での調査です。遺構が検出された箇所を中心に十月から十一月にかけて行いました。

調査の結果、弥生時代と平安時代の遺構を検出しました。弥生時代の遺構は竪穴住居址を五棟検出しています。平安時代のものは溝の一部を検出しています。出土した遺物は、弥生時代の土器や石包丁、石斧、石鏃、古墳時代の須恵器、平安時代の須恵器や土師器などでした。

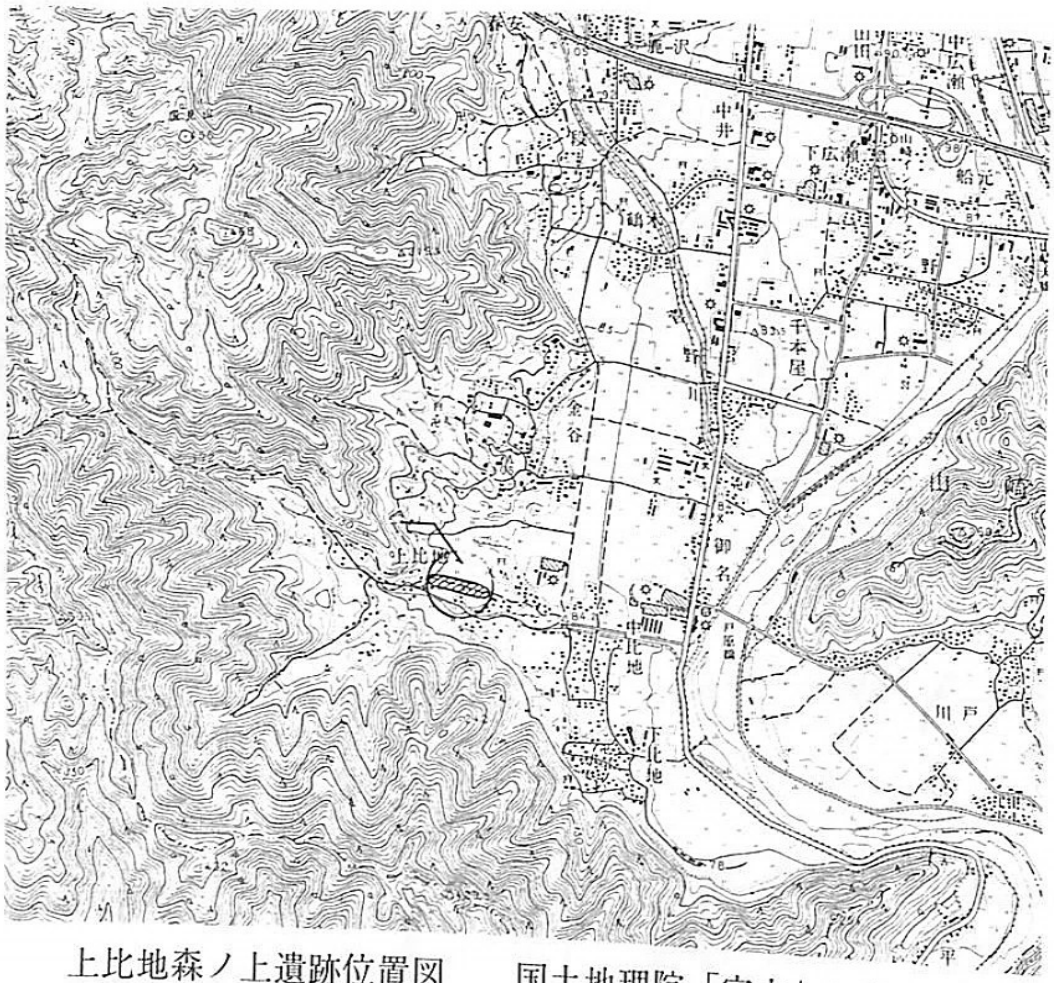
今回検出した弥生時代の竪穴住居址について紹介しますと、Ⅱ区の竪穴住居址SI01は、一辺が約五・八メートルの隅丸方形と思

われ、宍粟郡では珍しい弥生時代後期の屋内高床部（ベッド状遺構）を検出しています。保存状況も良好で、二本の柱穴と中央に一段低い床面と楕円形の土杭を検出しています。ここでは弥生時代後期の銅鐸の紋様にみられる連続同心円紋（スタンプ紋）の土器が出土しています。また、確認調査では磨製石包丁が見つかっています。稲の穂を刈り取るのに使うもので、山崎町では郡民病院の調査についで二列目です。上比地の台地上には弥生時代から人々が住んでいて米づくりが行われていたことがわかりました。

Ⅲ区の竪穴住居址ＳＩＯ２は径約四メートルの円形で、竪穴住居址ＳＩＯ５は径約六メートルの円形です。どちらの住居址も焼けた土壁や炭を多量に検出していることから火災に遭っていることが推定されます。また、建て替えが行われていたことがわかりました。この住居址では弥生式土器の高坏、木を伐採する石斧や狩猟用の石鏃が出土しています。今回の調査は範囲の狭いものでしたが、竪穴住居址を五棟も検出していることからみて、上比地森ノ上の段丘上には弥生時代の大規模な集落跡が存在しているものと思われます。一宮町の家原遺跡並かそれ以上の可能性も十分に考えられます。山崎は太古より播磨地方と吉備地方の接点にあたり、この遺跡は宍粟郡の弥生時代後期を考える上で貴重な資料になると思われます。

しかし今回の調査では、平安時代の溝を検出しましたが、『播磨國風土記』の「比治里」や『和名抄』の「比地郷」に関連する遺構や遺物は認められませんでした。周辺のどこかに埋もれているのでしょう。森ノ上には通称「ひじごうり」という水田が現存しますが、これが「比地郷」を見つける上で何らかの手がかりになるものと思われます。

なお、遺跡の名称は上比地字森ノ上の字名からとって「上比地森ノ上遺跡」としました。



上比地森ノ上遺跡位置図　　国土地理院「安志」1／25000

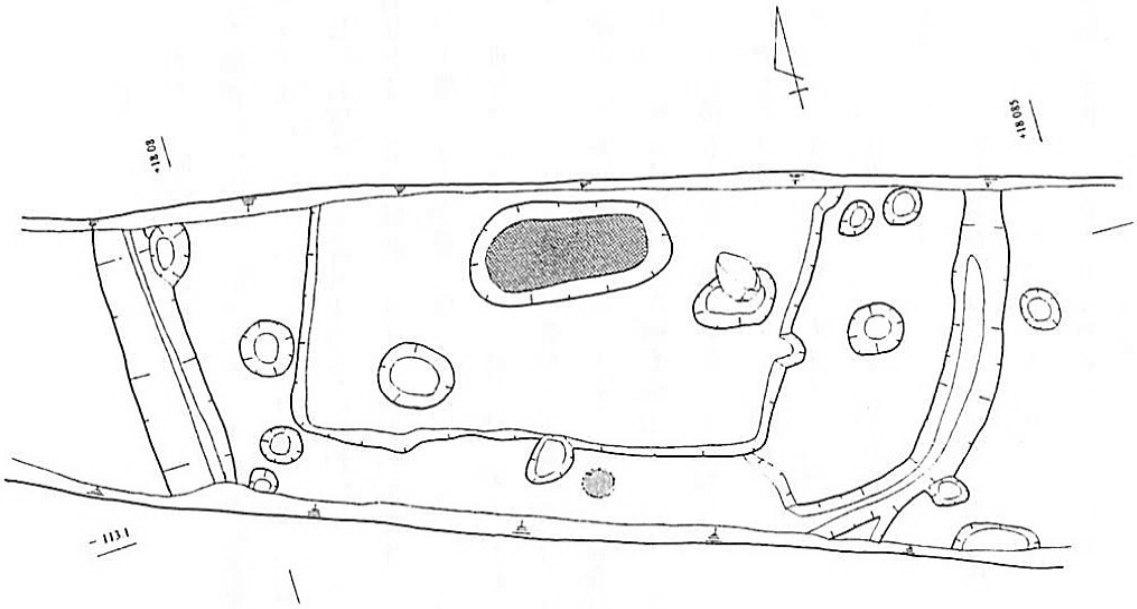


図４　Ⅱ区　竪穴式住居址SIO1実測図　Ｓ＝1／40

当尾・柳生の里を訪ねて

研修部　（故）垣口正信

十月三日（日）七十二名の参加者を乗せ、午前七時三十分バス二台で山崎を出発する。前日までは好天気であったが、生憎今日は朝から小雨が降り、旅行には好条件とはいえなかった。中国道を途中名塩にてトイレ休憩をとり、一路阪神高速道、近畿自動車道を走り、東大阪ＩＣより第二阪名高速道へと進み、奈良市へは、所要時間二時間の早さで着く。

奈良市街を抜けて、京都府加茂町に在る浄瑠璃寺には十時に到着した。少し小雨が降っていたが、他にも団体で亀岡市から来たという人達がお詣りしている。参道の両側には、馬酔木（あしび）が茂り、花の季節はさぞ美しい眺めと思われる。

山門をくぐると池を中心にした浄土庭園が広がり、東に三重塔、西に本堂の九体阿弥陀堂が美しい姿で建

呉服とジュエリー
とくさや
本店　本町（さつき通り）62-1680
咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

っている。この寺では、まず東の薬師仏に苦悩の救済を願い、その前で降り返って池越しに彼岸の阿弥陀仏に来迎を願うのが本来の礼拝の形であるといわれているが、私たちは時間の関係上、先に九体阿弥陀堂にお詣りする。団参があるため暫く待って寺僧の説明を聞く。薄暗い堂内には丈六仏を中心に、左右に半丈六仏が四体ずつ計九体の阿弥陀如来坐像（国宝）が横列に並び、両脇を持國天、増長天（国宝）が守っている。全身金ピカの九体阿弥陀仏は、九〇〇年前のものとは思われないほどの美しさであった。

堂宇を出て、宝池を中心とした庭園を散策する。平安時代のままの清浄な聖域が、仏像建築物と相俟って保存され今日に至っている。お詣りを済ませた頃より降っていた小雨も上がり、傘の必要もなくなった。バス駐車場付近には、食事処やみやげ物屋が並び、殊に気を引いたのは焼芋の香ばしい匂いが空腹にしみた。

十一時に次の岩船寺へと向う。岩船寺までは一・五キロメートルほどの距離であるが、日曜日とあって行楽のマイカーが多く行き交う。狭い道路を縫うようにバスを運転して下さる運転手さんには気の毒であった。道端には無人野菜売場がところどころにあり、新鮮な茄子やピーマンなど季節のものが売られている。この一帯は塔尾と云い、古くは浄土信仰の霊地として栄えたところで、石仏の里として多くの人々に親しまれている。

岩船寺は、天平元年（七二九）に行基が開いたと伝わる古刹で、山門の入口にある船の形をした岩は、僧侶が沐浴に使用したものといわれる。門をくぐると、正面に三重塔（重文）、右手に本堂、左手に十三重石塔や不動明王、五輪塔（いずれも重文）などがあって、こじんまりとした山里の寺の印象である。本堂へ上がりご住職の説明を聞く。堂内には、迫力ある本尊阿弥陀如来坐像が四天王立像に守られて安置されている。この迫力は、仏像のたくましい重圧感からくるものだと感じた。

境内には、アジサイ、梅、桜、睡蓮が多く花の寺としても知られ、秋には紅葉の名所としても名高い。

次に柳生の里へと向う。下見のとき通行可能とおもわれていた道路は、大型バスは通行不可能なため、一旦奈良市へ迂回して国道三六九号線を東へ進む。予定時刻より少し遅れて柳生に着く。早速民宿久保田にて号車別に分散して食事をとる。

昼食後は、全員揃って芳徳禅寺と旧柳生十平衛が開いたという正木坂道場を左に見て進む。芳徳禅寺は、寛永十五年柳生但馬守宗短が、亡父石舟斉供養のため創建した柳生家の菩提寺である。庫裏の資料室で、柳生家ゆかりの寺宝を見学してから廊下伝いに

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL(62)0036

入った本堂には、宗短と沢庵禅師の木像がまつられていた。本堂の裏手には、八十余基の柳生家歴代の墓があり、松林に囲まれた薄暗い参道をお詣りする。

お寺を出たところに、柳生の里を見下ろせる展望のいい場所があり、ここはもと柳生家の居城の地といわれ、石段、堀り割、見張り場など城の名ごりを今にとどめている。そこから西に見える高い石垣の建物が次に向かう旧柳生藩家老屋敷である。ここは、国家老小田主鈴の屋敷であったが、昭和三十九年作家山岡荘八氏の所有となり、柳生ブームを巻き起こした昭和四十六年のＮＨＫ大河ドラマ「春の坂道」の原作は、ここで構想が練られたといわれている。この屋敷は現在奈良市に寄贈されている。

この柳生は剣豪の里として知られ、柳生一族の根拠地で、吉川英治氏の「宮本武蔵」や前記の「春の坂道」の舞台として脚光をあびてきた山里であるが、今は訪れる人も少なく、やや、さびしい感じがする。

柳生の里を午後三時出発し帰路につく。しかし、折角奈良へ来たので、途中休憩を若草山入口のみやげもの店旅館春日野でとる。昔小学校時代に修学旅行で来たことが思い出されて、なつかしい思いであった。

帰りは車の渋滞もなく、午後六時二十分全員無事で山崎に帰着した。

「山崎町歴史街道」（三）

会報部

山崎町の史跡めぐりをしませんか。

（十四）山崎闇斎先生出身地（現闇斎神社境内）山崎町西鹿沢

山崎町役場を一〇〇米ばかり西へ行った交差点を少し南下した所に、山崎闇斎を祀る闇斎神社があります。ここは闇斎先生ゆかりの地でもあるわけです。

山崎闇斎は江戸時代初期の有名な儒学者で、儒学では南学派に属し、その流は後、崎門派（きもんは）と呼ばれた一派の創始者であり、また神道では垂加流神道を創始しました。その門弟は数千を数えたということです。

山崎闇斎の先祖は播州山崎の人として知られ、闇斎自著の「山崎家譜」には「曾祖父浄栄は播州の人、祖父浄泉は播州宍粟郡山崎村生まれ、弘治三年」とあり、木下家定（秀吉夫人北政所の兄、山崎に新町をつくった勝俊の父）に仕えたと言われています。また、闇斎自身も宍粟郡山崎村出身であることを自負していたよ

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-2576 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－7589

うであります。（ただし父浄因は天正十五年（一五八七）泉州岸和田生まれ、闇斎は元和四年（一六一八）京都生まれ。）

祖父の頃はこの辺の屋敷地に住んでいたということで、闇斎屋敷と言い伝えられてきました。その後、江戸時代は本多家家臣舟木静馬の屋敷となっていましたが、昭和十五年京都の闇斎神社よりその御霊をお迎えし、闇斎先生ゆかりの地として神社をお祭りしました。

『奉献の辞』の石碑

闇斎神社境内に吉川英治直筆の文字を刻んだ『奉献の辞』の石碑があります。これは、偉大な作家吉川英治氏より昭和三十五年秋、町有志の方々のご努力により山崎町に『山崎闇斎木像』と直筆の『奉献の辞』が寄贈されました。そのことを記念して自然石に、中央には『奉献の辞』を刻み込み、その横に木像背面銘文を記した銅版をはめ込んだ石碑が建立されました。

吉川英治氏寄贈の『木像』と『奉献の辞』原文は、図書館二階の歴史郷土館に保管し展示してあります。

『楷（かい）の木』（孔子の木とも言う）

神社境内に楷（トネリバハゼノキ）の木があります。これは九州大学名誉教援の岡田武彦先生より、儒学に熱心であり、また闇斎にもゆかりのあった会津藩校「日章館」育苗の楷の木を寄贈頂いたものです。楷の木は中国の孔子塚に生えているので、孔子の木とも言われていますが、ハゼノキの仲間で秋になると美しく紅葉します。

その他境内には、『歌人川田順氏の句碑』もあります。

（十五）源ケ谷山崎焼窯場跡（元山崎字源ケ谷八七番地）

山崎幼稚園東約二十メートルを山側へ少し上って行った所に窯場の跡があります。

山崎焼は幕末の藩主本多忠鄰（ただちか）天保五年（一八三四）の時代に、初代の陶工坂根栄治郎が元山崎の源ケ谷に窯を開き、花瓶その他を焼きました。昭和初期には陶工三代目村本作一の窯場があって、茶碗山といって親しまれていました。

山崎焼の一部は、現在図書館二階の歴史郷土館に展示してあります。

（十六）山崎八幡神社とモッコク

山崎八幡神社が勧請された時期は定かではありませんが、秀吉の長水城攻めのとき兵火によって衰廃しましたが、池田輝政以来の代々の領主が社領を寄進するなどして保護を加え再興しました。

池田恒元が奉納した箏・琵琶・笙・篳篥（ひちりき）などが歴史郷土館に展示してあります。

『八幡神社のモッコク』県指定天然記念物

拝殿の右の方に県指定天然記念物のモッコクがあります。

このモッコクは、社伝によりますと「樹齢七〇〇年、応仁元年（一四六七）神霊鎮座の勧請木（神を迎える木）であって自然樹のままで大切に保存されてきたもの」と言われています。

根回り、目通り幹囲とも二・二五メートル、樹高十三メートル、枝は東西とも約六・二メートル、南北へも約五・六メートルの範囲に広がっています。元来モッコクは暖かい地方の海岸に自生するツバキ科の常緑樹で成長の遅い木ですが、山崎の地でこれだけの大木に育ち、今も元気に成長を続けているのは珍しい存在です。

その他神社には元禄十二年（一六九九）建築で、郡内最古の正式の「能舞台」があります。また絵馬堂には正面左上角に「算額（和算額）」があります。これは中国から伝わった数学が日本で発達し、我が国独自の数学となったもので珍しいものです。

（十七）篠の丸（ささのまる）城跡

（標柱所在　門前―上寺登山合流点）

最上山の文化のこみち入り口の西方に城跡登山口があります。ここから標高三八八メートルまで登った所には篠の丸城跡があり、ここには東西約一五〇メートル、南北約一〇〇メートルの平坦地と、西方に空堀や曲輪の遺構があります。また、東南の山麓には古地名、平田丸、今は通称千畳敷と呼ばれる台地もあります。

元弘年間（一三三三年頃）赤松氏が播磨に勢力を張りつつあったころ、但馬・因幡・美作に通じる要衝の地山崎に赤松一族の釜内氏が山岳陣地として創始し、正平年間（一三四六年頃）播磨守護職赤松則村の次男貞範が城郭を築き、その長男顕則を城主としました。その後同正平年間（一三五二年頃）長水城が出来てからはその支城となり、以後嘉吉の変（一四四一年）で落城、しかし文明二年（一四七〇年）頃再興しましたが、天正八年（一五八〇年）秀吉軍の長水城攻撃により、長水城と運命を共にしました。

今は展望台も作られ、限下に山崎町の集落やまた周囲の山並みを展望することも出来ます。

篠の丸城は一名熊見城ともいった時代があったようです。

（十八）浜御殿跡　（標柱所在　揖保川十二波川岸）

揖保川の十二波の西土手に浜御殿跡の標柱があります。そこには立派な石垣で囲まれた一画（現在竹やぶになっている）があります。

この地は江戸時代藩主本多氏の別邸のあった所です。夏はおもに避暑をかねて家族が来て、水練や水馬の稽古を観賞したと伝えられています。そんなことから人々は浜御殿とか水見御殿と呼んでいたということです。

（十九）揖保川高瀬舟舟着場

（標柱場所　宍粟橋西詰北一〇〇メートル）

宍粟橋の西詰を川岸の道に沿って北へ歩いて行くと、草原の中に玉石で築いた突堤があります。ここは江戸時代の元和年間（一六二〇年頃）龍野屋孫兵衛が、揖保川川床の岩石などの障害物を取り除き水路を開いて高瀬舟が通るようにしました。それにより宍粟郡内で生産された薪炭、米、千種鉄などがこの両岸の出石（いだいし）から高瀬舟に積み込み、網干港を経て高砂、大阪方面へ送られました。また帰路は塩や海産物を積んで、白帆を揚げて溯ったり、綱で引っ張ったりして帰ってきました。毎年九月十日から翌年の六月十日まで行われていましたが、しかし大正十二年（一九二三）五月十二日を最後に陸上輸送に変わりました。

事務局だより

『奈良時代の鏡
千二百年前にあこがれた紋様（続編）』発行される

山崎郷土研究会の会員であり、本誌にもよく投稿してくださる「片山昭悟さん」がこのほど《奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様　続編》を発行された。A4版二六〇ページに及ぶ全国各地の奈良時代の鏡を体系化した専門研究本です。

片山氏の生まれた山崎町金谷の金谷一号墳から出土した瑞雲双鸞八花鏡に興味を持ったことが動機となり、平成四年から今回の発行まで奈良時代の鏡をテーマに五冊の著書を発行され、今回が総まとめになっています。非売本ですが町立図書館にも寄贈されていますので是非ご覧ください。

●垣口正信研修部長
御逝去のお知らせ

郷土研究会の役員として年二回の研修旅行の計画立案を平成五年以来八年間の永きに渡りご尽力願い、また紺屋町・寺町地区の幹事として平成元年から十二年間もお世話になりました垣口様が突然ご病気のため、お亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り致します。

◎役員の変更

○垣口研修部長さんの後任に織金達雄さんをお願いしました。